# 第22回
# ACEFスタディツアー

## バングラデシュ寺子屋訪問

2002年3月22日(金)～ 29日(金)

# みんなで記念撮影

２４日の朝、教会にて

# 第22回 ACEF スタディツアー報告書

## ✿ 目 次 ✿


- 船戸先生 ☒ バングラの漁村で ☒ …… P2
- ACEF・BDPについて …… P3
- 日程 …… P4～9
- スタッフ・メンバー紹介 …… P10～13
- ハプニング集 …… P14・15
- バングラデシュの文化 …… P16～18
- みんなの感想文 …… P19～33
- バングラデシュの地図 …… P34
- 編集後記 …… P35
- 名簿 …… P36

## バングラの漁村で

船戸　良隆

今回のツアーは、久しぶりの１週間でした。滞在期間１週間で、果たしてどうなのかと出発前は多少不安でした。以前の１週間チームがいま一つ成果があがらなかったように思われたからです。しかし、「案ずるより生むは易し」。今回は大成功でした。それにはＢＤＰの方々の配慮もありました。空港から直接プーバイル村に入り、着いたところはバングラの農村で、真っ暗やみ。電気が来ているのですが、ちょうど停電。停電はこの後、殆ど毎日ありましたから、昔のランプ生活（実際はろうそく生活）を思い出させるものでした。水浴びは外の井戸、いちいちポンプでくみ上げるのも学生にとっては、興味津々のようでした。しかも、数人がいっしょに入るのですから。

今回、はじめて訪れたネトロコナ県は、プーバイルより北へ車で約３時間半、典型的な農村で、清らかな河が流れていると聞いて行きました。もしかしたら泉からの流れか、と期待していきましたが、流れていた河は、別段変わっていない普通の河、と言っては日本的な感覚で、たしかにベンガル流で言えば、清らかです。あの茶色ではない河なのですから。

訪れたのは、ベタティ村、ジェレパラ学校。ジェレとは漁師のこと、パラとは家族のことだそうです。つまり、漁師さんたちが住んでいるのです。「えっ、こんな農村で魚が取れるんですか」という質問に、「ええ、ここの河で」という答え。でも、米を貯蔵する大きな桶もありましたから、多分、半農半漁でしょうか。

教室は、日本の藁葺き屋根のように葺かれた、バングラで普通に見られるものとは異なり、何となく日本の農家を連想させるものでした。壁のところは竹で編まれ、それに穴が開いていて風通しはすこぶる良い。その狭いところに、ぎゅうぎゅう２０人の生徒。オニタ先生は３０代後半か、でも、とても上手に教えておられました。

こんな漁村で勉強してどうなるんだ、という思いがふと頭をかすめます。「ナザレから何のよいものが出ようか」という聖書のことばが浮かんできました。でも、このファルークさんの故郷から、将来、ファルークさんを越える人材が生まれてくるかも知れません。教育は、優秀な人材を育成するためだけのものでないことは、重々分かりますが、どんな逸材が生まれてくるかを考えると胸が高鳴ります。「育ててくださるのは神なのですから。」

# ＢＤＰ （Basic Development Partners）

「教育は、人間としての尊厳と生きる力を育てるための基礎である」
１９９０年、教育の重要性を痛感した医師、ミナ・マラカール女史が首都ダッカのスラム地区で幼稚園を始めた事がきっかけとなって設立された、ベンガル人によるキリスト教のNGO団体です。学校に行けない子供たちのためにBDPスクールを建て、バングラデシュに教育を普及させる事を目的としています。また、教育の普及によってバングラデシュの貧困を無くすことを願っています。

最近では初等教育や女子教育・婦人教育とともに、卒業した子供の職業訓練にも力を注いでいます。現在は、マラカール女史は高齢のため、アルバート・マラカール氏が引き継ぎ、若いスタッフと共に高い志と熱い意欲を持って取り組んでいます。

# ACEF(アジアキリスト教教育基金)

マラカール女史の呼びかけに答えて、バングラデシュで教育の機会に恵まれない子供達に『寺子屋を贈ろう』と１９９０年に日本で発足したNGO団体。バングラデシュを始め、広くアジアに目を向け、多くのことを学びながら現在の私たちの生活を見つめなおし、アジアが抱える問題を促えています。

現在、使用済みカード（テレフォンカード、プリペードカード他）やアルミ缶回収、セミナーの開催のほか、国際協力に積極的に携わる人材の養成を目的に、年２回のスタディツアーや学生による勉強会が行われています。

# ACEFとBDPの関係

ACEFはBDPに財政的な援助をしていますが、その関係は与える側・もらう側という関係ではなく、対等なCO-WORKERとして活動しています
発足から１１年、この２つの団体が守られ発展してきた原動力は、まさにこの信頼関係にあるのです

# 第 22 回

# バングラデシュスタディーツアー日程

| Date | Time（覚えている限り） | 出来事 |
|---|---|---|
| 3/22（金） | 9:00 | 成田に大集合！手続き中数々のハプニング。（稲垣氏の日誌参照）→ |
| | 11:30 | バングラに向け出発。（機内食から、カレー生活の第一歩） |
| | 18:30（現地時間） | みんな無事に（船戸先生の封筒以外）到着。その後バスで Pubail へ… Tea&Biscuits+自己紹介· 何人かは初シャワーに挑戦！ |
| 3/23（土） | 6：30 | 起床。女の子達、シャワーに挑戦。寒そうだった… |
| | 7：00 | ラジオ体操、始まる。（船戸先生の動きにみんな大注目！） |
| | 8：00 | 朝食。みんなのルティー。 |
| | 9：00 | BDP に関する Lecture。Albert の熱弁に耳を傾ける。（千佳の感想）→ |
| | 12：30 | 昼食。手で食す。おかわりが激しい。 |
| | 14：00 | 3 チームに分かれて、初の Pubail 学校訪問（千佳の感想 2）→ |
| | 19：30 | 夕食。モジャモジャ食べる 途中から大雨＆雷が降る。 Sharing |

2002年3月22日 第22回春ツアー

ハプニング その① 井上先生、大蔵庭さん、出国審査時に消える。
(~~[illegible]~~ boarding gate で合流)

その② 若杉さん、身分証明書落とす(出国審査後)
井上先生が偶然発見する。

その③ 大庭さんのパスポート消える。
バンコクにてtransitの際発掘される。

その④ 成田空港で預けたナイフ入り封筒が
バングラデッシュの空港で見つからず、足止め。

稲垣 守

朝食後はlectureを行った。
lectureではBDPの行ってきたこと、現状、方針などをうかがった。より質の高い教育を行っていきたい
という姿勢に感動した。私も今、バングラデッシュに
必要なものは、国をになっていく人を作る教育だと思う。これからも
国をになっていくことのできる人材作りを目指した教育を行っていって
ほしいと思う。

小沢 千佳

午後、学校訪問をした。私は木部先生チームで、
という学校に行った。とても緊張したのだが、子ども達の
きれいな純粋な目に自然と笑顔になり、コミュニケーション
がとれた。しかし言葉が分からず、質問したいこともあまり
できず、残念だった。もっと勉強してこればよかったととても
後悔した。明日はもっと積極的に接するように努力して
いきたい。

| | | |
|---|---|---|
| 3/24（日） | 6：00 | ラジオ体操＆朝祷（日誌では、“船戸先生の元気よすぎ第２体操は省略”と明記。） |
| | 7：00 | 朝食。後に“クリクリ”と呼ばれる男に倣い、ルティーでバナナを包む。美味。 |
| | 8：00 | 近くの教会へ。“聖餐式”に参加。（そのときの模様を図解 by 真理子）→ |
| | | 学校訪問。３チームに分かれる。 |
| | 11：00 | 昼食。 |
| | 13：00 | Teacher's gathering　律子さん曰く“牛の糞”での儀式。 |
| | 15：00 | |
| | | 夕食＆Bangla songs を満喫。 |
| | 19：30 | Sharing |
| 3/25（月） | 6：30 | ラジオ体操＆朝祷（そろそろ苦痛になってきたのは私だけ？） |
| | 7：30 | 朝食。まだまだ飽きないルティー。 |
| | 9：00 | ダッカへ買い物に。ニューマーケットはお休み。代わりに高級デパート＆マーケットにて。（Episode by 美佳）→ |
| | 14：00 | 昼食。サリー、サロワカ＆ムハンマド守を激写。 |
| | 19：30 | 夕食。スイカを奪い合う。 |
| | | Sharing |
| 3/26（火） | 6：30 | ラジオ体操＆朝祷 |
| | 7：30 | 朝食。一部お粥。おいしそうーだった… |
| | 9：00 | Netrokona へ出発。「調子悪い組」に悲劇が！ |
| | 13：00 | 到着。ハビブさんとの出会い。 |
| | 13：45 | 昼食。羊カレー。 |
| | | Sightseeing。村の人達と交流。（詳細 by 奈美）→ |
| | 19：30 | 夕食。（ハビブさんが料理の鉄人だということが判明！） |
| | | Sharing |

絵と文
入江真理子

汚くて、自分でもよみたくない。

今日は、[illegible]ター受難週始まり。
まず、広場に集合して、司祭さんを中心に
説教、後、[illegible]の葉を各自持って

果物売り

[illegible]教会。

牛売り

子どもより

サングラスかけて、[illegible]印象。

さきりと痛い
[illegible]は、「つばめが
[illegible]」米[illegible]

司祭

キリストが、
十字架にかけ
[illegible]治する力をもって
[illegible]ジャル形式
で再現。

教会にて

私

[illegible]

[illegible]者(?) 3人で1人

⇒ 買い物。レジはコンピューターだレバングラデシュにもきれいなショッピングセンターがあるのか——と感動。でも日本とあまり変わらなかった所が味気なかった。
⇒ 2回目に行った所の買い物はねぎったりしておもしろかった。サリーとサロワカミューズとおかしをGET!

野崎美佳

Sightseeing

若子

疲れたので、ちょっとお昼寝したあと、外へ。Netrokonaに外国人がくるのは初めてだそう。人がみんな集まってきて、私達動物園状態。すぐとなりにあるヒンズー教の建物が神秘的でかなりステキ。川もきれい!

奈美

村の子どもたちとなわとびをした。みんな元気。のみこみが早くて、新しいことをどんどん覚えていく子ども達にびっくり。それからだるまさんが転んだ"をやった。ルールはちょっとめちゃくちゃだったけど、とっても楽しかった。足まっくろ。はりきりすぎて、明日体力があるか不安。家の中に入っても、穴からみんながのぞいてる。やっぱりめずらしいのね。

| | | |
|---|---|---|
| 3/27（水） | 6：30 | ラジオ体操（with 現地の人々）＆朝祷。みなさん珍しそうに見ていた。子供たちと遊ぶ。 |
| | 7：30 | 朝食。極大ルティーとカボチャカレー。 |
| | 9：00 | ３チームに分かれて学校訪問。（萌の場合）→ ココナッツ＆歌合戦 |
| | 12：30 | 昼食。オシム、イリアスの料理。モジャ。 |
| | 2：30 | ダッカに向け出発。（ファルーク家 by 萌）→ 無事（？）到着。 |
| | 19：30 | 夕食。スイカ最高ー。<br>Sharing は無しで晩祷のみ。 |
| 3/28（木） | 6：30 | 最後のラジオ体操（泣）上田ようこさんに感謝。<br>Last Devotion |
| | 7：30 | 朝食。アリさん方々へ、石鹸等を贈る。<br>ありがとうございました。 |
| | 9：00 | ニューマーケットへ。 |
| | 12：45 | 最後の昼食。辛いけどおいしー。 |
| | 13：20 | Wrap up-discussion　皆の想いが感じられて嬉しい。 |
| | 15：30 | 閉会礼拝。船戸先生の言葉が胸に残る。（蘭から一言）→ スタッフに、先生方に、みんなみんなに感謝！ |
| | 16：30 | Zia Airport へ。 |
| | 17：30 | 空港到着。ひたすら待つ。（飛行機来ないかも…不安がつのる。） |
| | 20 時頃 | 無事、離陸。ありがとーバングラ！<br>就寝… |
| 3/29（金） | 1 時頃 | バンコク到着。みんな爆睡。お疲れ様。 |
| | 8：30 | 成田到着。みんな無事でよかった！<br>解散。それぞれの思い出を胸に帰路へ… |

9時ごろ 各自3人の列に分かれて学校に行った。
学校では アルファベットと数字の練習をしていた。子供達は
各自の黒板を持っていて 先生が黒板に書いたのを書き
写していた。上手に書ける子もいれば なかなか書けない子も
いて、楽くたった。 授業後 教室の外で日本の歌
「大きな栗の木の下で」「頭・肩・ひざ・ポ・し」「花」を歌った。
お返しにバングラデシュの国歌を歌ってくれた。その間にも
その村に住んでいるたくさんの人達が私達を見に来ていた。
みんな本当にのびのびしそうだった。

松本 萌

車は小さい方がゆれるので the strongest persons が乗ることに。それは 本部先生、皆川君 そして私。
なかなかすごいゆれで、頭をぶつけることしばしば。途中で
ファルークさんの実家によった。家はマーケットからちょっと入った
ところで、テレビがあった!! ファルークさんのお父さん お母さん
弟さんに会った。ファル・クさん 弟さんとそっくり。バナナ味のケーキ&
バナナ&コーヒーをごちそうになった。すごくおいしかった。
帰りは寝たり 話したりした。ファル・クさんのお家に寄れた
のはとてもうれしかった。

15:30 閉会礼拝

さっきのラップ アップ ディスカッションの時から、涙をがまん
していた。船戸先生の言葉は心につきささる。バングラデシュに
来て、色々なことを考えた。解決できたわけではない
ないけれど、その解決の糸口を見つけられたように思う。

最後に献金をし、松本さんのお祈りで、こみ上げてくる涙が
顔を流れた。皆、同じ思いだったのだろうと思う。たった
1週間で、こんなにも深い仲になれたことを心から感謝。
ディスカッションでは、皆川くんが言ったという"1度会ったら、他人ではなく、その他人は友達になる"という言葉に感動した。

吉澤藍

# BANGLADESH

## ツアーのメンバー&スタッフたち♡

仲良し

### 船戸先生

ACEFの偉い人です。偉い人なのに、偉い人っぽくなくてとても素敵な先生です。1日の大半はアクティブに動きまわっているけど、(時には川を泳ぐ川坊主になったり…)ふっと見ると寝ています。
時間配分が上手い。と感じました。
先生と同じベッドで寝たかった…。

### アルバートさん

BDPの責任者。
頭のキレる男。皆にフレンドリーに接します。でも特有の話し口調で皆を混乱させることもしばしば。
本人も気にしてました。

### マモルくん

真面目な顔をしてサラリとおかしな事を言います。新社会人として銀行でもおもしろいキャラでいて欲しいです。でも、皆川君とはホモだちです。
(内緒)

### ファルークさん

ヒゲがチャームポイントのダンディーファルークさん。
"ポチョンドーコリ"と小声でささやきます。
笑顔が素敵でほれそうでした♡♡
写真にうつる顔が同じ顔で、自分がかっこいい写りを知っているのか?!と思いました。
アミ・トマケ・ポチョンドコリ!

### らんちゃん

ターバン(いつも頭にスカーフみたいなのをまいていたね)がよく似合うとってもプリティーならんちゃん。サロワ・カミューズもとってもよく似合ってる。ぜいたくに着てました。

### エリックさん

洋服店のオーナー。さっそうとバイクに乗ってあらわれ、いつもパリッとワイシャツをきこなしてました。
満面の笑みが印象的。バイクに乗った姿、かっこよかったです。

**木部** 先生

ICU先生。ひげとサックスが目印。たまに発するギャグは難しすぎてわからないことも…。でも笑顔がステキな優しいお兄さん。しかし、ちょっぴり目立ちはじめたお腹はやっぱりパパでした。

**ステファン**さん

手足が細くて長いメガネ君。バングラ太鼓のプロ。

バングラデ〜
バングラデ〜
バングラデ〜シュ♪

**ハモント**さん

おいらは芝居が好きさ。ときどき、BDPのスタッフから役者に転身しようかと本気で考えることがある。もちろん、嘘さ。ACEFの子達が準備してきた人形劇「赤ずきん」の台本の読み合わせの時、おいらはネックレバック(狼)の役をやったのさあ。血が騒いだよ。その日はカレーをおかわりしたぐらい。結局、上演には至らなかったけど、しっかり必ずおいらのネックレバックっぷりをご披露したいから、そのために今トレーニングに励んでいるのさ！エック、ドゥイ、ティン!!

**オシム**さん

暴走ドライバー。調子の悪い人が乗っていようがおかまいなし。見た目怖そうだけど実はかなりおちゃめ。写真うつりは最高。食後のごあいさつ「ごっそーさまでった」も最高。

**なみ**ちゃん

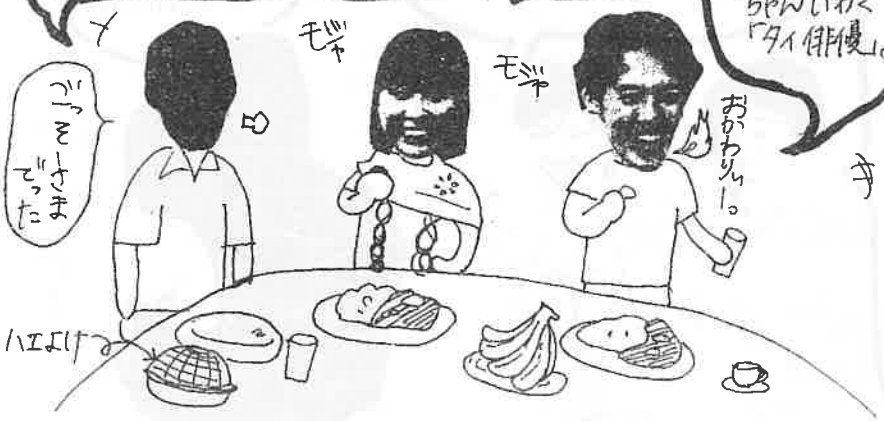
しぼんわかしてて、とってもものまね上手。とくにオシムさんの「ごっそさーでったー」をまねるのは天下一品！
食べるの大好き？！サロワカがチャイナ服みたいに似合ってました。

**たか**

今回のメンバーではいちばん年下。には思えない生意気ぶり。うそうそ実はジェントルマンでした。まりちゃんいわく「タイ俳優」。

**アリ**さん

毎日私達の食事を用意してくれてました。バングラデシュの食文化を堪能することができました。ありがとうございます♡とってもとってもおいしかったです。



## ハビブ さん

みんなの(!?)アイドル ハビブさん♥ネトロコナのただ一人のBDPスタッフ。私たちのために、一人でいろいろと準備してくれました。感謝感謝です。でも彼の言う1kmは数kmだったことも印象的です…。

## もゆ ちゃん

実はとってもおもしろいのがもゆっこ。もゆのミューズは皆の役にたっていました。ハビブさん大好きで主にちかちゃんとハビブさんをとりあっていました。

## ちか ちゃん

ほんわかほのぼのしてる女の子。そのせいだろうか、ネトロコナでは子供たちに遊ばれていた…かも!? ドンマイだちかちゃん! 私はあなたがすばらしいリコーダーの奏者だということを知っています。そしてハビブさん大好きだったことも…。会計補佐(?!)おつかれさまです。

## ゴメス=アンブロス さん

姿形が松本さんにとてもよく似ているためまちがえられることもしばしば?!
「ゴメスさーん」と呼ぶとなぜか笑い顔でした♪

## 松本 さん

常にここぞという時にばっちり写真をとってくれる皆の頼れるカメラマン。とっても優しくてたて笛の名手。子供たちのためにたくさん遊び道具をもってきてくれました。

## 井上 さん

小岩教会の牧師で聖学院小学校、幼稚園の宗教主任。日頃から子供たちと接している方ですが、BDPスクールでは言葉の通じない子供たちとのコミュニケーションに少し苦戦していたようです。その代わり、つっこみどころ満載の先生は大いに私たちを盛り上げてくれました。先生自身も子供なんじゃ?と思わせるところはさすが(?)です。

## ゆうこ さん

小学校の先生。マジでお若い! 元気バツグンでした。ネトロコナで紙ヒコーキで襲われた時の一言が忘れられない。「やっぱりガキはガキね!!」

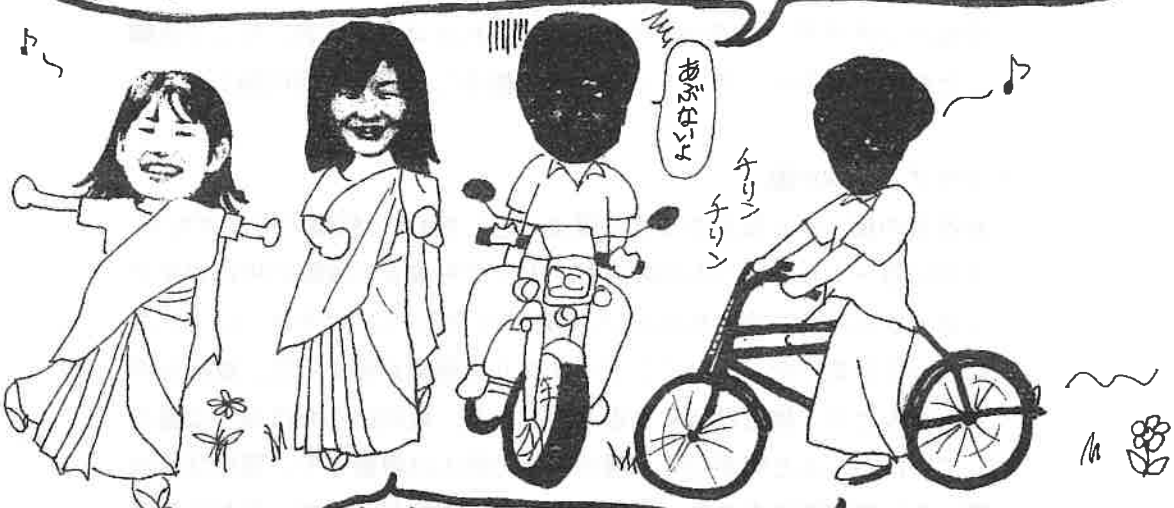
## オモル さん

オヨン君のパパ。くりくり仲間。

オヨンくんのあたま

## ラハジさん

ぼくはHONDA（バイク）で通勤する。この間は、サリー姿の日本人の女の子を後ろにのせてあげられて、うれしかったな♪へへ。独身だから、できたんだ。I have freedom！（←本人談）みんな、僕のことをクリクリと呼ぶ。ラハジという名前があるにもかかわらず。蚊にさされてかゆくなった部分のことを、ベンガル語でクリクリっていうんだって教えてあげたら、いつの間にかクリクリというあだ名がついていた。くやしいから、名裏語にしてやった。サリーを着たらんちゃんを、クリクリ！と褒めてやった。気付いたら、クリクリカンパニーの社長にされていた。オシュビダ・アチェ！




## みかちゃん

ミス・ハイテンション。たぶん今回のメンバーの中で一番元気。往生際が悪く、片づけ始めてもフルーツを食べ続けた。

## まりちゃん

とても器用。まりちゃんの作った"紙飛行機の作り方"はとってもGood。まりちゃんのおかげでバングラデシュの子供たちも紙飛行機が大好きになったにちがいない！今でも脳裏に焼きついて離れないのはまりちゃんの5本指に別れたくつ下…。快適そうだったね。

## プロカシさん

私達が「散歩に行きたい！」と言うと、よく一緒についてきてくれた人です。彼が笑うとき、心底楽しそうに笑います。本当に楽しそうだったなあ…。

## 大庭さん

今回に限らず今までのスタディー・ツアーにおいて最年長の大庭さん。でもバイタリティーあふれて元気いっぱいでした。私たちにいろんな話を聞かせてくれました。

## のりこさん

明るくて陽気。のりこさんのベンガル語はさすが。でも彼女の口から飛び出すダジャレは誰も止められなかった…。バングラデシュ大好き！

# ハプニング集　in BANGLADESH☆

♪プーバイルにて♪

・ゴキブリ―大庭さん編

今回バングラデシュでかなりの頻度で現れたゴキブリ君。そこで活躍したのが大庭さん。スリッパの一撃で彼をしとめた。母は強し。

・ゴキブリ―みか編

ある日の夜、みんながさっそく寝ようとしたら、「蚊帳の中にゴキブリがいる～！」というみかの声が。どうやら彼女の蚊帳の中にゴキブリが入りこんでしまったらしい。騒いでいるうちにゴキブリはどこかに行ってしまった... かくしてゴキブリ大捜査が始まった。蚊帳をゆすってみたり、枕をひっくり返してみたり。最初のうちはみんな協力していたが、ふと気がつくと隣の部屋の住人は寝静まり、部屋は真っ暗。そして同室のまりちゃんはこうこうと電気がついているなか就寝のご様子。あのときはちょっとせつなかったね、みかちゃん。

・牛の糞！？

３月２４日の午後、BDP 事務所に先生達が来てくれた。結婚式やお祝い事があるときに手のひらに描く模様を私達にも描いてくれることになったが、その材料はなんと牛の糞！すごくびっくり（そして少し嫌だった...）でも“郷に入れば郷に従え”だし、模様を描くのは左手だし、ご飯を食べるのは右手だから関係ないかな... と思っている間に先生はさっさと絵を描き始めた。下書きもしないでいきなり糞を手にのせてテキパキと描いていく先生。何も言えず、ただされるがまま... あっという間に手にはなにやら怪しげな模様。先生達はさらに腕のほうに描いたり、人によっては右手のほうにも描かれたり... 完全に遊ばれている私達... 気がつけば手には汗がダラダラ。よっぽど緊張していたのだろうか？そりゃあ、牛の糞を手のひらいっぱいに広げられた日には誰でもドッキンコドッキンコだよ！！でもこの牛の

糞、そんなに臭くないし、いつもやってくるハエも寄ってこない。おかしいな... と思いつつも先生といろいろな話をして盛り上がっているうちに絵もしあがり、先生達は帰られることに。そして最後に先生がそっと一言。「牛の糞っていうのは嘘なのよ（笑）」ガーン.. だーまーさーれーたー！！！！とそのときになってようやく気がついたのでした。とほほ。アルバートさんに一本取られましたね。

## ♪ネトロコナにて♪

・バングラデシュにもナインティーナインの岡村！？

ネトロコナで子供達と遊んでいて、ふと、気がつくとそこにナインティーナインの岡村そっくのり少年が！これにはびっくり。かわいい少年だった。彼は腰に手をあてて私達を見送ってくれた。こんな感じで

これがその少年→

・海坊主

ネトロコナで突然消えた船戸先生。女の子達に川に来るよう伝言があって行くと、なんと向こう岸に向かって泳ぐ先生の姿が！岸に上がるその姿は、まさに海坊主。

・腕輪

ネトロコナで熱烈歓迎を受けた私達だったが、ちかとなみにはちょっとしたハプニングが。二人は学校訪問で無理やり細い腕輪を押し込まれ、ツアー中抜けなくなってしまった... もしや一生このままはずせないのでは、と二人は恐怖におののいていたが、日本に帰ってきて開放された。抜くために二人はかなりがんばったようだ。

# バングラの食べもの

## 主食

**ルティ**
インドのナンみたい。毎朝食べました。

**カレー**
日に日に辛くなっていった。
もちろん手で食べました。爪が黄色い!

**ダルスープ**
お豆のスープ。これまた辛い。

**サラダ**
ショシャ(キュウリ)とトマト。

## デザート

**バナナ**
日本のより甘くてずっとおいしい!
ルティにくるんで食べるのが流行。

**パパイヤ**
南国の味。甘ーい。

**ティー**
最高。みんな大好き。
毎日飲んでました。

# バングラデシュの服装について

バングラデシュでは多くの人が普段の生活の中で、伝統の衣装を身にまとっている。色は淡いものは少なく、原色の濃い色を好んで着ている。それはとても似合っていて美しい。では実際のどのような服装をしているのか見ていきたいと思う。

＜男の人＞

・ルンギ

布を筒状に縫って、スカートのようにしたもの。シャツを上に着て、ルンギをはいている人が多い。これは普段着であり、決してフォーマルなものではない。農民や、リキシャワラはこの格好で仕事をしている。ほとんどがチェック模様。

・パンジャビ

年寄りがよく着ている。若い人もイベントのときによく着る。中にズボンをはき、上からかぶるように、ひざより長いシャツを着る。

＜女の人＞

・ サリー

約 116×540ｃｍの一枚の布。中にブラウスとペチコートを着る。器用に全身に巻きつける。一般的にサリーは結婚した人が着ることになっている。サリーの歴史は何千年も昔にさかのぼり、ガンダーラの寺院の彫刻には２ピースのサリーが記されている。サリーが大きく変化したのは、15 世紀のムガール人の侵略によってであった。それからやがて固定されていき、今のようなサリーになった。

・サロワカミューズ

下のズボンをサロワ、上をカミューズという。オロナという布を首にかける。これによって胸を隠す。サロワカミューズは結婚をしていない人が着るものとされているが、今は既婚者の人も着ている。

・チュリ

ブレスレット。バングラデシュの女の方はみんなおしゃれでアクセサリーをたくさん身につけている。

・ティプ

額につけている装飾品。

・メンディ

ヘンネというハーブで作った液を使って体に模様を描く。1、2 週間は落ちない。

これらの服はどれも気候、宗教のことが配慮されているようだ。衣装はお互いを理解する上で大切なものであるだろう。バングラデシュに行くときにはぜひ、これらの伝統衣装を身にまとってみては！！

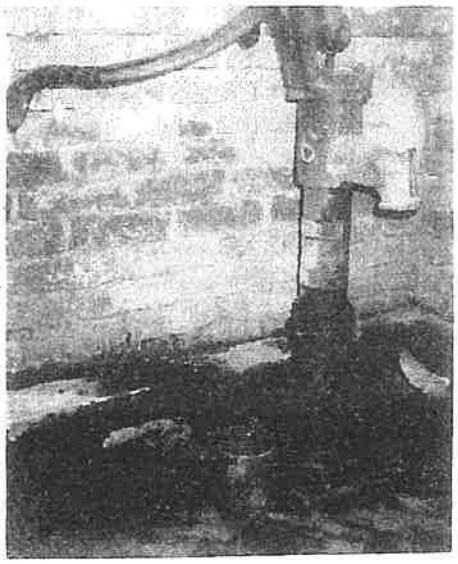
## バングラデシュのお風呂＆トイレ

私達がバングラデシュで初めて体験したことは数多くあるが、日常生活の中で特に（！？）印象に残っているお風呂とトイレについて紹介しようと思う。

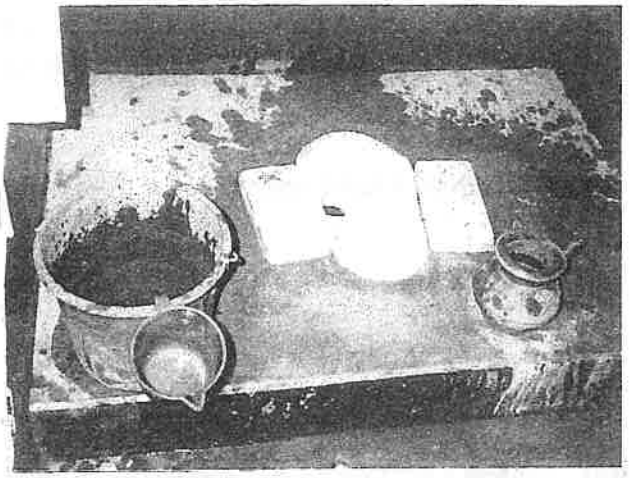
・お風呂

バングラデシュで私達はお風呂に入ることを“水浴び”と呼んでいた。水浴びをする前にバケツになみなみと水をはっておいてその中から水を少しずつ汲んで体を洗う。水はもちろん井戸から汲む。夕方に水浴びをすると、一日の疲れがとれてスッキリ♪朝水浴びをするとだんだん明けていく空を見ながら、修行僧の気持ちが少し理解できる。目が覚めること間違いなし！

実際の井戸です→



・トイレ



通常バングラデシュの人はトイレに行ったあと紙は使用せず、水をかける。もちろん私達も同じようにやった。便器の横に水をはった大きなバケツがあり、その中から必要に応じて小さなバケツに水を入れ替え、使用する。手に水をのせて使用するのだが、慣れないうちはこれがなかなか難しい。だが一週間もたたないうちにみんな慣れていました。

## 共に歩んで行けたら・・・

大庭くめ子

参加申込書にある「目的」を読み直してみると、―体験を通してアジアを理解する―とあります。私は、自分はあの方たちにとって“異人”であると気付いた。自分がアジア人であることの自覚不足、しかも優位にあるかのような錯覚さえ持っていることに。

バングラデシュの大地は日本と似ていて、幼い頃逗留した田舎の母の実家をなつかしく思い浮かべる思いがした。

あの方たちの平和な笑顔、真直ぐにこちらに向ける素直な眼差しに出会うとき、ああこれがいいのだと感じる。

教育って何だろう。あの子どもたちの中に、もっと高く、もっと深く知りたいという願いがあるならそれが叶えられるような環境を作ってあげたらいいし、もっと豊かにと願うならその方法もあろうと思う。それがＡＣＥＦのＢＤＰの喜ばしい任務なのでしょう。両者はこれまでにもずいぶん実績をあげられて来ている。

この際、私たちはもっと各自の教会でＰＲをして深い理解のもとにバングラデシュの人たちと共に歩んで行けたらと思う。あつい祈りと小さな志を結集し続けていきたいと思っている。

私個人としては、この年齢まで迂闊だったと後悔している。又今回この国の言葉を勉強してこなかったこと、その上英語も話せなくて、とても申し訳なく残念に思っている。２４日の日曜礼拝にカトリックでしたが参加することが出来、感謝している。

今回若い方たちに支えていただいて大切な体験をなし得たことを深く感謝しています。行き届いた準備を、心を尽くして整えてくださった皆様に対しても感謝し尽くせない思いを持っております。

ＡＣＥＦの上に主のお恵みが豊かにありますように。

## 寺子屋と職業訓練校

ぶどうの枝伝道所　松本紳一郎

バングラデシュでのスタディ・ツアーから帰国して一週間、改めて、今さらながらバングラデシュと日本との生活環境の差の大きさを実感すると同時に、それにもかかわらず両者に共通する課題といったものにも徐々に気づかされて来る思いがしています。もとより、私にとって初めての南アジアへの訪問であり、わずか一週間の滞在というごく限られた体験の中からですが、現時点での「印象記」を記させていただきます。もとより、この印象や感想は、今回知り合えた方々との交流を通して、今後まだまだ、大きく変えられ、深められる事と予期するところですが。

ツアーが始まって間もない２度目のシェアリングの時間に船戸先生から、ワークキャンプとスタディツアーの違いという点に触れられて、「その時何かをした、作った」というだけで終わってしまうのではなく、バングラにいっぱい借りを作って帰って、その借金を背負った私が何を出来るかということを、日本で継続して考えて欲しいという話をお聴きしました。確かに、ＢＤＰの“Ｐ”は Partners と聞いてはいても、「ＡＣＥＦを通じてアジアの恵まれない子どもたちに寄金する」という意識は、「豊かな国に暮らす者が、さして痛みも伴わない程度のほんの一部を節約して貧しい国の子どもに与える」というだけであったら、見方によってはこの上ない傲慢・不遜なものに終始してしまうことでしょう。その点でも、今回、ＢＤＰのスタッフの方々にお会いでき、それこそ連休も日曜日（バングラではイスラム教なので、「金曜日」がお休みだが）も割いてお世話いただき、寝食の提供・案内・警護に加えて、ＢＤＰの活動の歴史と現況、さらに今後の課題について、丁寧に解説していただき、また討論もしていただいたことは、大変感謝なことでした。

今回強く印象に残ったことが二つあります。その第一は、Pubail から車で４時間北へ走った（そのうち約３分の１は煉瓦で舗装した凸凹道、それを 80km/h 以上で疾走した）農村で、識字率 30%という村に開設されたばかりの「寺子屋」（学校の前身としての幼稚園）への訪問。これは、まさに「学校のない地域に、地域の人々と話し合いつつ学校を作っていく」というＢＤＰの働きの原点を見るものでした。「教育」がどんなに貧しい子どもたちに「チャンス」を提供するこ

とであり、両親や村人に夢と希望を与えることであるかを熱っぽく語って下さったＢＤＰの方々の話を、私たちの宿泊したＢＤＰ事務所に押し寄せて来る大勢の老若男女の村人たちの単なる好奇ではない、好意と愛情に満ちた反応が雄弁に証明していました。

そして、もう一つの鮮烈な印象は「職業訓練校」の青年との対話です。せっかく５年間の初等教育を終了しても、経済的な事情で勉強を続けられなくなったり、両親が教育を受けていないために、中等教育の必要を理解してもらえなかったりして、体の成長と共に目の前の日銭稼ぎのために学校をやめて劣悪な条件下の肉体労働に追いやられる「ドロップアウトした」学生に、安定した職業への就職の道を、と願って設けられたＢＤＰのもう一つのプログラムは、今後間違いなく急ピッチで押し寄せて来るであろうバングラデシュの都市化・工業化社会へ向けての期待と挑戦に溢れた新しい対応であると、私の目には映りました。学んでいる学生たちも時には数 10km の道のりを通って来ていて、技術を身につけて何とか良い仕事に就きたい、できればさらに高い技術教育を受けたいとの希望を話してくれました。しかし、日々の過酷な環境や社会習慣、周囲の無理解の中に投げ出されている青年たちは、一方で「向上の夢」を抱きつつも、もう一方では「人生の意味や目的」、あるいは「生きる力を与えてくれる希望」を探し求めて、揺れ動いている様に見受けられました。彼らに比べたら物質的にはずっと富んでいる日本の中高生たちの不登校は、私たち大人の目にはとかく、身勝手で、甘えていると映りがちですが、技術化社会を支える労働者の育成を目的とした機械的知識の詰め込みに「意味」を見いだせなくなっている青年の魂の悲鳴がそこにあるとすれば、それはバングラデシュの青年たちとも共通するものではないだろうか、というのが素人の目でみた青年の教育現場における印象です。それだけに Albert さんや Stephen さんの「夢」をかけた職業訓練校の建設が、時代的に最もタイムリーで、社会的に最も有効なカリキュラムの確立によって成功へと導かれるように、そのために微力ながらも何か私たちに応援できることはないのだろうか、という思いに強く駆られます。

まずは、夢を抱いて母国建設に真剣に打ち込んでいるバングラデシュの指導者たるＢＤＰの方々と彼らを取り囲む諸問題を、私の周りの人々に伝え、そこに私たち日本人の課題とも重なる他人事でない多くの問題があることを見出し、共に考える人たちを得たいものだ、とまだ未整理な言葉ながら考えています。

# 「バングラデシュを訪問して」

聖学院小学校　井上　馨

現在私は、東京の小岩にある教会の牧師をしながら、聖学院小学校というキリスト教学校に努めている。その学校の中で、私はＡＣＥＦの委員として、子どもたちや保護者にＡＣＥＦのことを宣伝し、その働きにぜひ協力してくれるようにと呼びかけている。しかしこの働きを続けていくためには、私自身が一度バングラデシュを訪れ、バングラデシュの実状やそこにおけるＡＣＥＦの働きを見ておくことが大切だとかねがね考えていた。幸いこの春、一週間のスタディーツアーが行われることがわかったので、学校と相談の上、応募し、参加することにした。

ところで、今回バングラデシュを訪れるまでの私のバングラデシュに関する知識は真にお粗末なものであった。その国の人たちがどんな家に住み、どんなものを食べて生活しているのかということに関してはほとんど知らなかった。幸い、２月 10 日と 11 日の二日間、参加者のための研修会が開かれたので、それに参加しそこで多少の知識を得ることができた。しかし、やはり「百聞は一見にしかず」の諺の通りであった。バングラデシュに行く前は、食事のこと、トイレのこと等で多少不安を覚えていた。食事は朝、昼、晩、毎日毎日カレー料理で、それを手で掴んで口に入れるとか、トイレではペーパーを使用しないで、水を手につけてそれで後始末をすると聞かされていたが、それが実際どんなものかよくわからず多少不安であった。しかし行ってみて一日でその不安は吹き飛んでしまった。手で食物を掴む食習慣はすぐ慣れたし、バングラデシュ料理は結構おいしかった。トイレの方は一度やってみると意外に簡単で、何でもないことがすぐわかった。参加者は女子大生が多かったけれども、私より年配の方もおられ、老いも若きもみなよく話し込み、楽しい良い交わりができたと思っている。

ところで、現地においては、参加者一同がいくつかのグループに分かれて学校訪問をしたが、学校を訪れて何よりも感心したのは、子どもたちが非常に礼儀正しかったことと、熱心に学習に励んでいたことである。どの先生方も全身全霊、教育の業に打ち込んでおられたし、子どもたちもそれに正しく応答していた。子どもたちの目が輝いていたのが強く印象に残っている。日本においては学校崩壊、学級崩壊のことが取沙汰されるようになって久しいが、私が訪れた学校ではその片鱗すら見えなかった。自由時間には子どもたちと遊んだが、子どもたちはよくついてきてくれて、一緒に楽しく遊ぶことができた。

ところで私たちは今回学校で学んでいる子どもたちの姿を見てまわったのだが、今日、バングラデシュにおいては、貧困の故に学校教育を受けられない子どもがまだまだ大勢いるとのことである。実際ダッカに行ったとき、私たちの車が渋滞に巻き込まれ、停車した時、近寄ってきて、窓越しに花を買ってくれと叫ぶ少女がいた。そういった子どもは他にも大勢いるのであろう。

現在バングラデシュが抱えている問題はたくさんあると思う。しかし明日のバングラデシュを考える時、何よりも大切なのは教育の問題だと思う。私たちの世話をしてくださったＢＤＰのスタッフの方々はそのことをよく理解し日夜その問題に取り組んでおられるが、そのことに心から敬意を表したい。

私たちもＢＤＰのスタッフの方々が取り組んでいる課題を理解し、陰ながら応援し続けていきたい。「隗(かい)より始めよ」という言葉があるが、何よりも私の努める教会や学校において、ＡＣＥＦのこと、バングラデシュのことを語り聞かせ、多くの人々の理解と協力を得たいと思っている。

「スタディーツアーに参加して」

木部尚志

１０年越しの願いが実現して、とても嬉しく思っています。スタディーツアーに参加することで、「善き生とはどのようなものか」、「善き生を可能とする社会はどのようなものか」、「自然と経済発展の調和はいかにして可能か」といった、社会科学者として取り組むべき根本問題が、これまでよりも一層鮮明となり、さらには切迫性を帯びたものとなりました。

僕に強烈な印象を与えたのは、ネットロコナの村落での滞在でした。今でも?ここで出会ったアワンという名の１０歳の少年のことを、何故だかよく思い出します。いや、脳裏から離れないというべきかもしれません。今年の夏１０歳になる自分の娘をみると、この思いも強くなります。これも「共に生きる」ことの一側面なのでしょう。

遅ればせながらのスタディーツアー参加は、空間や社会環境を越えた同時代性を、遅延なく僕に教えてくれました。

５年後に、君の住むところを、ふたたび訪れてみたい。
緑の水田は、村と人々を包み込んでいるだろうか。
どんな広がりを、空はもっているだろうか。
１５歳の君の眼は、いかなる光を宿しているのだろう。
僕は待とう。大きな川で成長したナマズが証言してくれる時まで。

## 今、思うこと

北川　裕子

帰国してあわただしいいつもの生活に自分の心と体が対応してゆく速度のあまりの早さに驚き、とまどっています。そんな中、「忘れてはいけない」という警告のようにバングラデシュの思い出が度々よみがえってきます。人々の恥じらいを含んだ澄んだ目、人なつっこい笑顔、風にそよぐ若々しい緑、深まる闇の中でちかちかと飛び交っていた蛍たち、どこからともなく聞こえてくるコーランの響き・・・

そしてこのように頭に浮かんでくる物のひとつにベンガル人の音楽があります。BDPのスタッフの方々が夜薄暗がりの中で演奏してくれた音楽にしても、ネトロコナの村人が披露してくれた歌の数々にしても、教会で聴いた賛美歌にしても、初めてなのになぜかどこかで聴いたことのあるような音楽でした。愁いを感じさせる物寂しい甘い歌声は、心地よい抑揚に乗って、ゆったりと流れる川をイメージさせるものでした。それらはわたしたちの日頃耳にしている音楽とは質的に異なる性質のもののような気さえしました。

それはなぜでしょうか。わたしたち日本人が歌ったり、演奏したりするとき、「正しく美しく」を重視していると思います。そして、はやり歌の多くは聴衆にうけることを計算して作られます。バングラデシュの人々の歌や演奏はもちろん上手です。しかしそれに加えてすごく歌心があるのです。彼らの心や思いがストレートに伝わってくるのを感じました。そしてこのような音楽こそ、本来の音楽の姿なのだろうなと思いました。

心や思いをありのままに伝える手段が、人からの評価の対象となったり、金儲けの道具となってしまっていることは、しょうがないことではあるけれど、寂しさを覚えます。音楽に限らず、わたしたちは社会から様々な制約を受けて、どこか歪められているのではないかと思います。他人の目を気にして本当の自分を押し殺したり、常識や慣習にとらわれて自分の気持ちに逆らったり、効率を優先させる結果本当に大事なことを見失ったりしている自分に、ふと気づくことがあります。恵まれた生活をしているのに、心が満たされず、不満を抱えている人間の何と多いことか。私は決して、経済的に貧しいと心が豊かで、豊かになると心が貧しくなる、という短絡的な見方をしたいわけではありません。ただ、教育を受け、経済的、精神的ゆとりのある生活を享受しているわたしたちは、それにふさわしい生き方をしたい、するべきだ、と思うのです。

これからは、つまらないことに悩んで時間を浪費したり、自分に与えられた能力やエネルギーを使わずにさぼり続ける生き方を、変えてゆきたいと思います。具体的に努力したいことは次の３つです。

①自分と向き合い、自分がどういう人間かを知ること。

②他者と関わり、その人がどういう人間かを知ろうとすること。

③言葉・物・時間の使い方を見直すこと。

これらがいつかは、自分の人生を本当の意味で生きることや人の命を大切にすることにつながるはず、と信じているのですが、みなさんはどう思いますか？

普段体験することができない多くのことを体験し、帰国後もなかなか興奮から覚めやらない感じです。我々は知らない国のことを語るとき、その国について聞いた事や本からの情報をもとに語ります。それらの情報は大抵、とても片寄ったもので、聞く人に片寄ったイメージを与えることになってしまいます。実際にその国にいってみると分かることですが、実はその国にはそれまでのイメージを全く違うものとするくらいの多くの新鮮な発見があるわけです。それは貧しい国といわれる国における豊かさ、美しさであったり、その逆であったりするでしょう。僕がバングラディッシュにいって知ったのは、これまでのイメージ通りの貧しい、厳しい現実と同時に、我々が持っていない力強さ、美しさであり、持とうと思っても持つことができないであろう豊かさでありました。

そのような美しさの一つとしては音楽があげられます。BDP のスタッフの人にトゥップラと言う太鼓をたたき方を教えてもらった時のことです。とても親切に、詳しく教えてくれていたのですが、突然、別のスタッフがハルモニアというアコーディオンのような楽器を使って、歌を歌いだしたのです。その時トゥップラを教えてくれていたスタッフは、教えている最中であったのにも関わらずトゥップラを僕から取り上げ、ハルモニアに合わせて自分でたたき出しました。すこしビックリしましたが、そこにはどうしてもこの歌にトゥップラの音を合わせたいという気持ちが表れていました。彼らが歌っていたのはバングラディッシュの国歌で、ベンガルの自然や人の美しさ、そこに住むことの幸せなどを歌ったものですが、真剣に歌い、楽器を奏でる彼らを見ていると、自分達の気持ちをそのまま歌っているということがよく分かりました。そういう姿を見せ付けられると何もいえなくなります。これまでに何度も歌ったことがあるであろう歌を何度歌っても気持ちが乗るということ、そして外国人の前でも気持ちよく歌うことができるということは、国に対する誇りの大きさというものを感じさせます。賛美歌を除いて、そのような歌が私にはあるのだろうかと考えさせられた次第です。

近代化によって犠牲にしなければならないものうち、このような美しい人間の心というものが挙げられるかもしれません。しかし何を犠牲にして、何を犠牲にしないで残しておくかを決めることが出来るのが人間です。歌を歌った彼らは、バングラディッシュを愛する心を犠牲にすることなく、いつまでも持ち続けると想います。それはその人間の信念に因っていると思いました。バングラディッシュの地において、真に人間らしくあるために、自分の信念というものを固く持つことの大切さを学びました。片寄った情報で知らない国のことを知ろうとすることよりも、実際に足を運んで見て、接するということは、その国のことをより深く知るだけでなく、自らを顧みるとてもよい機会となるとつくづく思いました。

from
稲垣　守
Mamoru Inagaki

# バングラデシュに行って

小澤　千佳

「バングラデシュ」、この国の名前を聞いてまず最初に思うことは何であろうか。洪水、貧しい国、人口密度の高い国というようなことであろうか。私も実際この国に行くまではこのようなイメージを持ち、またこのイメージしかなかった。しかしこの国を訪れて感じたことは、人々のあたたかさだった。

私は今までバングラデシュの人たちは日本人とは違うのだという目を持っていたのかもしれない。もっと言えば、経済的に日本が豊かだという理由で、日本の方が優位に立っているように感じていたように思う。しかし実際は日本人もバングラデシュ人も全く同じ人間であり、仲間なのである。学校訪問で訪れた学校の子供たちの目はきらきら輝き、一緒に遊んだメトロコナの子供たちの笑顔はまぶしかった。私達のためにつんできてくれた花はとても美しかった。なぜ今まで気が付かなかったのだろうか。ただ唯一の違いは生まれ育った環境なのだということ。どうして日本に育てば、好きな物が食べられ、好きなことができ、好きなように暮せるのに、バングラデシュに育ったらやりたいことすら実現できないのか、仲間である彼らに自分の選んだ人生をおくってほしい、満足のいく人生を歩んでほしい。私はそのお手伝いをしていきたい。

入江真理子

## 橙のツメ

リキシャをこぐ足
にがい呼吸
クラクションの大洪水

夜明けの祈り
牛もあくび
水くみポンプの摩擦音

橙のツメ

あおくてあおくてあおい稲
鼻までまんぷくあまい風
とろりとぬるむ川の水
凛ともゆるホタルたち

目・目・目
むらびとたちの
メ・メ・メ
どこへいっても
め・め・め
め・め・め・め・め
め・め・め

手をつなぎ
いっしょに走って
歌をうたう

すって、はいて
すって、はいて
すって、はいて
すって・・・、はく

みんないっしょに
きのうも、すって、はいた
きょうも、はいて、すった
願わくば、あしたも
すって、はいて
はいて、すって

# ～ばんぐらツアー記～

東京女子大学　社会学校２年　野崎美佳

私にとって初めての海外旅行がバングラデシュ！だったので、見るもの聞くものすべてに驚きでした。最初は手でカレーを食べることにとまどって箸やスプーンが恋しくなったけど、今では手で食べられないことが非常に悲しい。

日頃、当たり前のように使っていた電気やガスや水道がとってもありがたく感じた一週間でした。

それにしてもバングラデシュの人たちは何ていい人たちなんだろう！　スタッフの方たちはとても親切　できるだけこちらの要望をかなえようとしてくれる。特に朝昼晩ほとんど休みなくおいしい御飯を作ってくれた女性スタッフの方々、本当にありがとう。子どもたちも我先にとつんできたお花をプレゼントしてくれて、気がつくと持ちきれないくらいの花束になってました。

バングラデシュのごはんはとてもおいしい！（どうやら私たちに出してくれたごはんはバングラではごちそうにあたるものらしい）パパイヤもココナッツもカレーもチャーもどれも忘れられないくらいおいしい味でした。自然もとてもきれい！あんなにたくさんのホタルを見たのは初めて！車の中からずーっと続く田園風景を見てとっても心癒されました。

日本人初の村、ネトロコナでは、はじめは村人たちは奇妙なものを見る目で私たちを見てたけど、すぐにうちとけて一緒に遊んだり歌ったりしました。そのうち宿舎の周りは人でいっぱいになっていました。

一方で物乞いをする人たちやゴミをあさる子どもやスラムを見て、貧富の差に驚いてしまいました。一つの国の中に驚くほど貧富の差が存在していました。

自分の日々の悩みなんて忘れ去ってしまうくらい、いろんなことに驚きっぱなしの一週間でした。このすばらしい経験の機会を与えてくれたみんなに感謝しています。忘れたくない、とても貴重な一週間でした。

# 私のバングラ体験記　若杉奈美

３月２２日、私は日本を旅立ちました。私にとっては、初めての海外体験。そのせいか、一週間前からバングラデシュのことで頭がいっぱいでした。その興奮と期待を抱えてダッカに到着した私の目に飛び込んできたのはものすごい車、車、車、ひと、ひと、ひとの数。とうとうバングラデシュに着いたんだ、という感動に浸っている時間もなく、私たちはバスに乗って、真っ暗なプーバイルに到着すると、さっそくＢＤＰのスタッフの方が歓迎してくれました。思い起こしてみれば、最初から最後まで、ＢＤＰのスタッフの方にお世話になってばかりで、私たちが実りある一週間を送れたことも、安全に帰ってこれたのも、周りのひとたちの配慮があってこそだと、今痛感しています。そんなことを思い出していると、バングラでの一週間は、「感謝」という言葉で締めくくることができると思います。スタッフの方の心遣いだけでなく、私が体を壊した時に、心配してくれた仲間にも、学校訪問に行ったときも、いろいろと気遣ってくれた先生にも、感謝をしなければと思いました。

この一週間は、日本で今まで、当たり前だと思っていたことが、次々と覆され、良い意味で驚いたことも、ショックをうけたことも様々にありました。楽しいこと、驚くこと、悲しいこと、腹のたつこと、盛りだくさんで、自分の感情が高ぶったり、沈んだりの繰り返しで、精神面でも考えさせられました。子供たちと体当たりで遊んで理屈ぬきに楽しいと感じる自分もいれば、車の窓ガラスをたたく子供から目をそらしてしまう自分も、言葉が通じないことでコミュニケーションをとれないもどかしさにいら立つ自分も、全て間違いなくあの一週間を走りぬいた自分自身であることに気づいたとき、そんな自分を全部受け止めて、私に何ができるか、一歩進んで考えてみることにしました。それが、この一週間をこれからの私に活かしていく術なのだと、感じるのです。短いけれど、ぎっしり詰まった一週間を送れたことを、みんなに感謝してこの体験記を締めくくりたいと思います。

おわり

## バングラデシュからの贈り物

松本　萌

バングラデシュの空港を出たとき、暑さがのしかかってくるように感じられた。黄みがかったライトの下、空港の外にはほこりっぽい道が続いていて、車で町の中を通っていくと、たくさんの人力車、車、そして人がいた。これが私の初めて見たバングラデシュだった。

バングラデシュでの一週間は私が初めて体験することの連続だった。手で食べること、井戸から水を汲むこと、蚊帳をはって寝ること、よく停電になること、かなり揺れる車... いろいろなことを思い出すことができるが、その中でも一番記憶に残っているのは、子供達の顔だ。初めて行った小学校で紙飛行機をみんなで作ったとき、自分の紙飛行機をなくして悲しそうな顔をしていた女の子、私達が授業を見学しながら写真を撮っていると、窓の外から自分も撮ってよ、とアピールしてきた、ちょっといたずらっぽそうな顔をしていた男の子、日本の歌を歌って、とせがんできた大人びた顔の女の子達、そっとめずらしいピンクの花をくれた男の子、ネトロコナで縄跳びやだるまさんが転んだを一緒にした子供達、自分の黒板に書いた数字を自慢げに見せてくれた男の子... 様々な表情をした子供達がいたが、彼等の目はなにごとも見逃さないとばかりに大きく、彼等が笑うとき、まさに笑みがこぼれでていた。本当に楽しそうに、うれしそうに笑っていた。私がバングラデシュのことを思い出すとき、まっさきに頭に浮かぶのは子供達の顔だ。子供達と手をつないで遊んだとき、体温の温かさ、熱気を感じた。彼等から人の温かさを感じた。

私がバングラデシュで体験したこと、学んだこと、考えさせられたことはここに書き出せないほどたくさんある。それらが過去のものとなってしまうことは避けられない。しかし忘れることはないだろう。バングラデシュの一週間が今後の私にどのように影響するのかはわからない。だが、私の心の中に深く刻まれた一週間であることは確かだ。そしてもう一つはっきりと言えることは、私にとってのバングラデシュの思い出、バングラデシュからの贈り物は子供達の笑顔であるということだ。

# “友達”

古澤　藍

バングラデシュで、私はたくさんの“友達”に出会いました。まず、スタディーツアーに一緒に参加した“友達”。幅広い年代の人と友達になるという機会は日常生活においては少ないので、とても新鮮でした。

それから、バングラデシュのＢＤＰのスタッフ。“友達”と呼べるほど仲良くなれたかどうかわからないけれど、１週間私たちを助け、努力してくれたスタッフの皆さんには本当に感謝しています。

また、ダッカへ行く途中で花をくれた花売りの女の子、プーバイルの事務所のそばに住んでいる人、ネトロコナで一緒に遊んだ子どもたち、日曜日に教会で出会った人、訪問先の学校の子ども、先生たち等、こんなに多くの“友達”を私はバングラデシュで見つけました。

人物的な出会いによってできた“友達”以外にも、私は多くの“友達”に会ったように思います。人々の温かい心、優しい心、子どもたちの瞳、暖かい気候・・・バングラデシュで出会ったすべての人・物が私の“友達”です。

実はスタディーツアーに参加する前、こんなに楽しいツアーになるとは思っていませんでした。私は暑さも苦手だし、日本とは全く異なる環境の中で、きっと苦労することがあると思っていました。でも、それもよい経験になるだろうし、学生時代にしか、こんな経験はできないと思っていたのです。しかし実際に行ってみると、苦労する事などほとんどなく、本当に毎日毎日があっという間に過ぎていきました。自分はこんなにも適応能力があるんだという自信もつきました。でも一番大きかったのはやはりバングラデシュの“友達”がいつも私を優しく包み込み、支えてくれていたからだと思います。必ずまた、私はバングラデシュに帰ってきます。たくさんの“友達”に会うために。

## 心が踊る体験

皆川宣宏

「何故あなたはバングラデシュの子どもたちが学校に行けないことを気に病むのか？」

これは現地のスタッフの一人が、日本人である僕たちに投げかけた問いだ。悩んだ末の僕なりの回答は、「何故なら、『友達』だから、かな。」このように思えたこと、それが今回のツアーの一番の財産だと感じる。バングラデシュの空気を吸い、おいしいものを食べ、多くの人と接し文化に触れた。バングラデシュの一端が体の隅々まで浸透したように思える。その根底にあるのは、やはり「人」という存在だと思う。そしてこのツアーで触れ合ったのは、本やテレビでは解り得ない、生身の人間だ。生きた人間同士の付き合い、共に笑い、泣き、遊び、話し合う。そこには人間関係、国際関係にとって一番大切なものが散りばめられているように感じた。このような生き生きとした心が踊るような体験をさせてくれた今回のスタディーツアー。それを支えてくれた多くの人に感謝したい。

# いつも夢を持ちつつ

井上儀子

今回はあっという間の１週間でしたが、新しく寺子屋学校の始まった北部ネトロコナ地区をも訪問することができて、実り多い旅となりました。毎回のスタディーツアーでは、その度に新しい発見があり、新しい感動があります。今回も BDP の姿勢に、またまたほれ込んでしまいました。

BDP では現在、寺子屋幼稚園、寺子屋小学校（５年間）、小学校卒業生で経済的に困難な生徒にハイスクール進学のための奨学金支給、職業訓練学校等を行っています。BDP の寺子屋学校の特徴は、今まで学校に行くことのできなかった子どもたちにも教育の機会を与えることです。学校のない村に新しく始まったクラスでは、いろいろな年齢の子どもたちが一緒に幼稚園、一年生からスタートします。そして、途中で学校をやめざるを得なくなった子どもたちも、ハイスクールに進学できなかった子どもたちも、社会に役立つ勉強ができるようにと、職業訓練学校が始まりました。ダッカには木工、溶接、裁縫クラスがあり、プーバイル村には、電気、機械クラスがあります。

このプーバイル村に滞在したのですが、私たちのために料理を作ってくださったシラさんとおしゃべりをしていたら、いろいろなことが芋づる式にわかってきました。シラさんは、私が初めてプーバイルを訪れた時に滞在したハルバイド村の出身です。1992 年のことですが、彼女はまだ小さくて滞在先の家の台所でお手伝いをしていたそうです。毎日毎日その村の子どもたちが集まってきて、歌ったり踊ったり、一緒に遊んでいたので、何人かの子どもたちの名前を覚え、今でもその情景を印象深く思い出すことができます。今から 10 年前のことですから、寺子屋が始まったばかりでした。お金持ちの家で働いている小さな子どもたちも、みんなと一緒に学校に行かせてもらい、嬉々として学ぶことを喜んでいました。そんな中で、一人田んぼで働いている少年がいました。彼はもう大きいので、小学校 1 年生にはちょっと恥ずかしくて入れない、と学校には行けませんでした。文字を読んだり書いたりすることができないまま、一生を過ごしてしまうのだろうかと案じていたのですが、その彼が職業訓練学校で勉強して、電気の仕事ができるようになっているという話を聞いたのです。その後の詳しい過程はわかりませんが、取り残されてしまった子どもたちにも、今一度チャンスを与える、そこにＢＤＰの基本的な姿勢があります。その村に、軽度の知恵遅れの子どもがいましたが、彼も何年もかかって小学校を終え（毎年進級試験に合格しなければ上の学年に進めないので）、同じく職業訓練学校で電気の技術を身につけたそうです。そしてそのことを、村全体で喜んでいるのです。裕福とか貧しいとか関係なく、頭が良いとか悪いとか関係なく、その子どもの人生にチャンスを与える。こんなすばらしい仕事に共にあずからせていただいていることを、本当に嬉しく思いました。

これからも BDP は、一人でも多くの子どもたちに学ぶチャンスが与えられるように、学校のない村に、少数民族の村にと、手を差し伸べていくことでしょう。そのことを覚えて祈り続けていきたいと思います。

インド
ネトロコナ
1泊だけしたバングラデシュの農村。自然がとてもきれいでした。ハビブさん大活躍。
NETROKONA
プーバイル
ここに滞在してました。
PUBAIL
ガンジスがわ
DHAKA
ダッカ
バングラデシュの首都。飛行場はココ。
インド
インド

# バングラデシュ MAP

# 編集後記

☆この表紙を作ったのは私です。どうだ！編集の集まりの時は、食べてばっかでごめんなさい。食べる時黙ってててごめんなさい。でも、バングラから帰ってからも、みんなに会えたから楽しかったです。思い出をありがとう。　なみ

☆今、私の手元にはバングラデシュで撮った写真があり、それを見るたびにバングラデシュでの出来事が鮮やかに頭に浮かんでくる。みなさんがこの本を読んだとき、『そういえばバングラデシュではそういうことがあったな。』と思い出し、笑みがこぼれるような，そんな本に　なればいいと思っている。どうでしたか？この本がみなさんのバングラデシュでの思い出の１ページになりますように。　もゆ

☆編集の仕事に携わり、薄れ掛けていたバングラデシュの記憶をまた違った目で見ることができました。そこで学んだ何か大切な物を少しは形にできたと思います。大変大変と嘆きながら、何とか完成して自己満足！！　たか

☆人物紹介すごぉーく大変でした。お疲れ様でした。全て他己紹介です。誰が誰を紹介したかは内緒☆　みか

☆バングラデシュが大好き!バングラデシュでの体験を忘れずにいろいろなことに取り組んでいきたいです。　ちか

☆編集じゃないのに、なぜか編集を手伝ってしまいました。みんなの役に立てたかどうかわからないけど、個人的にはかなり楽しんでやらせていただきました。バングラでの共通の話題。ひと時でも同じ時間を共有できたことに感謝します。編集での楽しさが、皆さんにも伝わってほしいです。　らん

## 第22回ACEFスタディーツアー参加者名簿（2002春）

| | 氏名 | 教会 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | オオバ クメコ<br>大庭 くめ子 | 浦和東教会 | 主婦 |
| 2 | イノウエ カオル<br>井上 馨 | 小岩教会 | 聖学院小宗教主任 |
| 3 | マツモト シンイチロウ<br>松本 紳一郎 | ぶどうの枝伝道所 | シーエーシーズ㈱ |
| 4 | キベ タカシ<br>木部 尚志 | ICU教会 | ICU助教授 |
| 5 | キタガワ ユウコ<br>北川 裕子 | | 横須賀学院小教諭 |
| 6 | イナガキ マモル<br>稲垣 守 | 聖ヶ丘教会 | 東京都立大経済4年 |
| 7 | オザワ チカ<br>小澤 千佳 | | 東京女子大地域2年 |
| 8 | イリエ マリコ<br>入江 真理子 | 蓮田キリスト教会 | 東京女子大コミュニケ1年 |
| 9 | ノザキ ミカ<br>野崎 美佳 | | 東京女子大社会2年 |
| 10 | ワカスギ ナミ<br>若杉 奈美 | | 東京女子大社会2年 |
| 11 | マツモト モユ<br>松本 萌 | | 東京女子大言語2年 |
| 12 | フルサワ ラン<br>古澤 藍 | 早稲田教会 | 東京女子大日本文学1年 |
| 13 | ミナガワ タカヒロ<br>皆川 宣宏 | | ICU国際関係1年 |
| 14 | フナト ヨシタカ<br>船戸 良隆 | 教団教師 | ACEF事務局長 |
| 15 | イノウエ ノリコ<br>井上 儀子 | 浦和東教会 | ACEF事務局 |

最後にプーバイルで撮影

アジアキリスト教教育基金
〒169-0051　東京都新宿区西早稲田2-3-18-26
TEL.＆FAX.03-3208-1925

ACEF

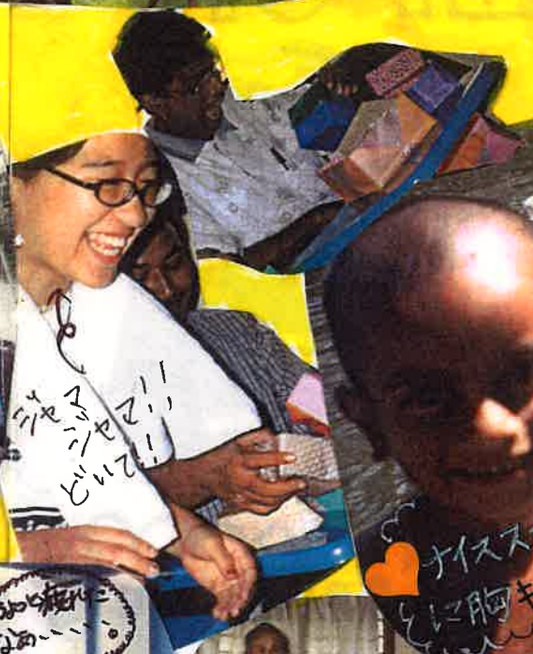
エイセフ The Asia Christian Education Fund

あなたもＡＣＥＦの会員になってください！

学生会員　年額１口２，０００円
個人会員　年額１口５，０００円
団体会員　年額１口５、００００円
一時寄付　全額自由

郵便振替口座
00100 -0-185540
アジアキリスト教教育基金

# Jamalpur Kathila



## ヒンドゥ寺院